ラジオ放送

＜令和3年1月～3月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.434

もくじ ～*contents*

＜先生のおはなし＞

☞金光教の先生のお話です。

●年頭放送　いのちを元気に
金光教教務総長　岩﨑道與　*page 1*

●芸能界での失敗体験
本部在籍　金光浩道　*page 5*

●ラジカセ
大阪府・枚方教会　四斗晴彦　*page 10*

●月極駐車場
福岡県・行橋教会　井手美知雄　*page 14*

●私にできるでしょうか
愛知県・豊川教会　今泉明　*page 18*

●神様プロデュース
福岡県・不知火教会　池本ひろ江　*page 22*

●ツイてない日なんて、ない！
宮城県・仙台南部教会　西川浩明　*page 26*

●劇団GAHが目指すもの
東京都・麻布教会　松本信吉　*page 31*

●ぼく、試験が怖いよ
大阪府・平野教会　宮下寿美　*page 35*

●マスクの下の笑顔
福岡県・上山田教会　池田美枝　*page 39*

●待たされて
三重県・鳥羽教会　野呂教行　*page 43*

●おさがりの自転車
鳥取県・石脇教会　福場信枝　*page 47*

●親に頼る
大阪府・春日出教会　川勝信道　*page 51*

《年頭放送》

「いのちを元気に」

金光教教務総長　岩崎道與（いわさきみちよ）

皆様、あけましておめでとうございます。

昨年は新型コロナウイルス感染症の影響がいろいろな形で現れました。そうした中でも、このように新しい年を迎えられたことを、まずはお慶び申し上げます。

そして今年もいろいろなことが起こってくるでしょう。信心とは、起こってくる事柄を受け止める構えを作ることでもあります。

大きな病気が見付かった方が、初めて私の奉仕する教会へ参拝されました。その方は、さらに詳しい検査を受け、その結果で手術の方法が決まることを話してくれました。そこで、私は次のような話をしました。

あなたのお話の中身はよく分かりました。こうして早く病気が見付かったことを、まずは神様にお礼を申し上げましょう。その上で、万全な体調で手術が受けられるようにお願いさせていただきましょう。

ところで、神様にお願いした上での手術ではあっても、その治療はお医者さんがすること。せっかくですから、私はあなたにもう一つの治療を受けてもらいたいんです。それは神様にしてもらう治療です。これから信心の大切な話をしますから、よく聞いてくださいね。

神様にしてもらう治療とは、「いのち」を治

してもらう治療です。心や体の病気、お金や人間関係のトラブルなど、私たちが出遭ういろいろな問題は、地面から生えてきた草のようなものです。問題という草が生えてくると、皆さんはその草を刈り取ろうとします。でも、草は根を抜かないと、またすぐに生えてきます。

この病気も、あなたの人生という道の上に生えてきた草かも知れません。それを刈り取ることはお医者さんがしてくれます。でも、根が残ったままでは、次の草が生えてきます。それは、また病気という草かもしれませんし、お金や人間関係の問題という草かもしれません。だからこそ、あなたにはこの機会に問題の根を抜いてもらいたいんです。

病気を知らされた時、「何で私が」と思ったかもしれません。でもね、信心で見ていくと、そこにはちゃんとした理由があるんです。問題の根が見えてくるんです。

それじゃあ、その理由は何か。それは「いのちを大切にしてきたかどうか」です。ただ、それは、体を酷使したり、暴飲暴食を重ねてきたと言っているのではありませんよ。

私が言う「いのち」というのは、ひらがなで書く「いのち」です。私たちは親の「いのち」を受け継いで生まれてきました。これは遺伝ということだけではなく、親の思いや人生、家の歴史などもみんな「いのち」に溶け込んでいます。そして、親もまた、そのまた親の「いのち」を受け継いでいます。こうして受け継いできた「いのち」の流れに目を向けると、自分の思い

を超えた、大きなお働きを感じると思います。ああ、「いのち」って授けられたものなんだなあって。どうですか。

その方は大きくうなずきました。

じゃあ、そうして授けられた「いのち」にどう向き合ってきたのでしょうか。健康に気を使うことはあっても、「いのち」に気を配り、大切にしてきたことがありましたか。つながり授けられている「いのち」に目を向けず、感謝をせずにいたら、「いのち」が衰えてしまいます。だからこそ、今回の病気をきっかけに、それこそ「いのち」という、あなた自身の根っこを大切にしてもらいたいのです。

ではどうすることが「いのち」を大切にすることになるのか。

「いのち」を大切にするには、まずは朝起きたら、新しい今日の「いのち」を頂いたことにお礼を申し上げる。そして、夜寝る前に、その「いのち」を一日差し支えなく運ばせていただけたことにお礼を申し上げる。このことをしてもらいたいのです。

その次にしてもらいたいことは、「いのち」を支えるものにお礼をすることです。それは何か。食べ物飲み物と、大小便です。あなたの体に入って来るものと出て行くものにお礼を申し上げてもらいたいんです。何かを飲み食いする時、それそのものと、それを育てたお働きにお礼をする。それと、大小便が出た時に、体の悪い物も一緒に外に出してくれたお働きにお礼をする。

こうして、手術までの間に、朝晩の「いのち」のお礼と、「いのち」を支えるお働きへのお礼ができていけば、あなたの「いのち」はどんどん元気になっていきます。そうなれば、お医者さんの治療も楽になり、手術は成功するでしょう。

その上で、私からあなたにお願いしたいことがあります。ここまでのお話は、金光教の教祖様の教えを元にしたお話です。ですから、今までの私のお話に納得をして、それなら「いのち」を大切にしていこうと思ってくださったなら、ぜひとも金光教の教祖様が出会った神様に心を向けて取り組んでもらいたいんです。

その神様は「天地金乃神様（てんちかねのかみ）」という神様で、私たちは「いのち」の親、「いのち」の大元と頂いています。この天地金乃神様に心を向け、天地金乃神様というお名前をお唱えして、「いのち」へのお礼をしていってもらいたいのです。どうでしょうか。

この方は、「はい」と答えました。

それなら、どうぞこれからは「いのち」を大切にしていって、神様から問題の根を抜いてもらいましょう。

こうして「いのち」へのお礼を重ねたこの方の手術は無事成功しました。

皆さんも、今年一年、「いのち」を大切にして、「いのち」を元気にしていっていただきたいと思います。

《先生のおはなし》

「芸能界での失敗体験」

岡山県・本部在籍　金光浩道（こんこうひろみち）

おはようございます。パーソナリティーの岩﨑弥生（いわさきやよい）です。

突然ですが、あなたの趣味は何ですか？　その趣味で好きなことが自分の職業にできたら、こんな幸せなことはありませんね。でも、それができる人は、ほんのひと握りのことでしょう。ましてや、競争の激しい芸能界で生き延びるには、いろいろな試練があるように思います。

今日は、好きなギターで身を立て、芸能界で活躍した経験のある方のお話です。岡山県・金光教本部在籍、金光浩道先生のお話で、「芸能界での失敗体験」。

私が東京でバンド活動の仕事をしていた頃の失敗談をお聞きいただきたいと思います。

私は小学5年生の時に、祖母から誕生日プレゼントにフォークギターをもらい、少しずつギターを弾くようになりました。そして中学2年生の時に同級生からバンドに誘われ、高校卒業まで3人でバンドを組んでいました。高校卒業後は3人もバラバラになり、私は東京へ出させていただきました。

私が加入することになるプロのバンドとの出会いは、友達が渋谷にある楽器屋でアルバイトをしていて、ちょうどそこに出入りされている音楽事務所の方から、所属バンドのギタリスト

が抜けたのでギタリストを探しているという話があったらしく、その友達が私のことを強くプッシュしてくれたのです。オーディションのような形で、「1回遊びにきてください」と言われたので、ギター1本持って行かせていただきました。一緒に音を出して、方向性が合っているということを分かっていただいたというか、音で意気投合できまして、「じゃあ、一緒にやろうか」と言っていただきました。そして、いきなり次の日から待っていたのは、毎日毎日のリハーサルでした。

最初のうちはメンバーそれぞれが他に仕事を持っていて、私もアルバイトをしながら、日々リハーサルをしていました。そしてライブ活動を重ねていくうちに、業界の方も見にきてくださるようになり、芸能界でも相当大きな事務所の社長さんに気に入っていただき、業務提携をさせてもらえることになりました。そのおかげでテレビ・ラジオ・雑誌など露出も増えまして、多くの方々に聴いていただけるようになりました。

テレビの影響はホントすごいです。ボーカルの女性もドラマに出演させてもらったり、ライブ会場もライブハウスからホールへと規模も大きくなり、チケットの値段も上がっていきました。オリコンの上位一桁にも入るようになり、本当に調子良く、乗りに乗って売れ始めてきた頃に、調子付くどころか、調子に乗ってしまう出来事が起こってしまったのです。

芸能界というところは、売れ始めますと、ど

こからともなくいろんな船頭さんが出てきまして、「うちでやりたい」とか「移籍をしないか」とか、「独立したらどうか」だとか、いろいろな話をもらったんですね。若いし周りもよく見えていなかったんでしょう。調子に乗って多少天狗(てんぐ)になっているものですから、独立という話に乗っかってしまいました。その独立の話を進めるのに、簡単に言うと、順序を間違えてしまいまして、業務提携してくださっている事務所の社長さんに多大な迷惑を掛けてしまい、さらには所属事務所も辞めてしまうという、最悪の状況に陥ってしまいました。まあ干されるというほど売れてはいませんでしたが、3年ほどは活動停止状態になってしまいました。

今思うと、結局は、「元を大切にしていなかった」ということが一番の問題だったと思います。バンドの生みの親であり、バンドを一から育ててくださった所属事務所に対する感謝の気持ちをすっかり忘れて、自分たちで何でもできると勘違いして、調子に乗って物事を進めてしまったということです。やはり生みの親に対する感謝の気持ちは、常に持っていなくてはなりません。自分の元を大切にしないと、万事うまくいかない道理であります。物事を進める順序が違ってきますからね。

本当に大きな失敗で、多くの方々に迷惑を掛けてしまいましたが、大事なことを学べた機会でもあったと思います。自分の命の元は親様であり、ご先祖様であり、その先の大本である天地の親神様の働きによって生かされている命で

あります。その揺るぎのない真実、自分のルーツ、元のところを常に忘れないように心掛け、物事を進める順番を間違えないようにしたいものだと思わされます。

いかがでしたか。

芸能界というと、動くお金も桁違いで、特別な世界のような気がしていましたが、大切なところは、どこの世界も同じなんですね。誰しも、身の丈以上のことに、初めは心配や不安でいっぱいなのですが、うまく事が進んでいくと、ついおごる気持ちが出て、大切な元となるところを見失いがちです。そんな時こそ、一旦立ち止まって、「元は何なのか、順序は間違っていないか確かめてみる」。心にとめておきたい言葉です。

そしてまた、自分のルーツ、元となるところを忘れないという道理に合った生き方をすることが、親様、ご先祖様、天地の親神様が安心してくださり、喜んでくださる生き方なんだと感じるお話でした。

《先生のおはなし》

「ラジカセ」

大阪府・枚方（ひらかた）教会　四斗晴彦（しとはるひこ）

金光教の教会に生まれた私は、30歳を過ぎてから、金光教の教師になりました。教会長である私の父は、決して多くを語るような人ではありませんが、その背中で歩むべき道を教えてくれるような人で、私は50歳になろうかという年になっても、父親を頼りに教会勤めをしているような有り様でした。

4年前、その父が78歳で突然この世を去りました。朝、いつもの時間に起きてこないので、様子を見にいくと、既に体が冷たくなっていました。父は大きな病気にかかることもなく、心身とも健やかに毎日を過ごしておりました。亡くなる前日も、いつもと同じように好きなお酒を飲み、ひいきのプロ野球チームの試合をテレビで見てから床に就いていましたから、一体何が起こったのかしばらく理解できませんでした。

それから慌ただしく葬儀を仕えました。それまでずっと父を頼りにしてきましたから、葬儀が終わると、父はもうこの世にいないんだという現実に、「さあこれから教会長として自分はやっていけるのであろうか。どうすればいいのだろうか」という心配、不安が、湧き上がる雲のように現れては消え、消えては現れます。

金光教には、「心配する心を神に預けて、信心する心になれよ」という教えがあり、それま

で教会にお参りする人には、教師の立場からいつもそのようなお話を伝えている、そんな私でありながら、いざ自分にも大変な状況が生まれてみると、オロオロとするばかりです。そんな日々が一日一日と過ぎ去る中で、父は今の自分の姿をどのように見ているだろうかという思いが生まれてきました。亡くなった父のほうが、よっぽど今の私の姿を心配しているのではないかと気付き、「父に心配を掛けてはいけない。さあ頑張らねば」と心が動くようになりました。

それから1年、2年と、残された母と2人で教会に奉仕し、常に「私がしっかりしなければならない。私がやらなくちゃいけない」という、「私が、私が」という思いで取り組んでいた頃のことです。隣町にある教会の先生から電話連絡がありました。「あなたのお父さんが30数年前に私の教会でお話ししたお説教を録音したカセットテープが出てきたので、あなたに差し上げます」という内容でした。

ところが、私の教会にはカセットテープを再生する機械がありません。もうカセットテープを使うこともないだろうと処分してしまっていたのです。そのことを伝えると、昔流行(はや)ったカセットテープを再生するポータブルの機械を一緒に貸してくれました。

人から勧められて本を貸してもらっても、なかなか読む気が起こらず、でも感想を求められると困るので、「読まなきゃ、読まなきゃ」という気持ちだけが先走るといったことは、誰しも経験すると思います。その時の私がまさにそ

うでした。貸してもらったカセットテープを「聞かなきゃ、聞かなきゃ」と気持ちだけが焦るものの、そのままひと月ほど経過してしまったのです。

そんなある日、私の教会にお参りする方が、「先生、もし邪魔ではなかったら、これを教会で使ってくれませんか」と1台の機械を持ってこられました。それは、ラジオカセットテープレコーダー、いわゆる「ラジカセ」でした。このタイミングでラジカセを持ってこられたということは、「早くカセットテープを聞きなさい！」という神様からのメッセージであると受け取る他はありません。私は、「ありがとうございます。使わせていただきます！」と喜んで返事し、早速にそのラジカセを使って、昔の父の話を聞きました。それは次のようなお話でした。

毎日教会にお参りしているご婦人が、ある日ぴたりと来なくなった。父はどうしたのだろうかと心配していると、2週間くらい経った頃にそのご婦人がお参りに来られた。その様子は、杖をつきつき、ようやくに歩いているような状態で、聞いてみるとお尻に出来物ができて腫れ上がり、起き上がることができず、ようやく今日になってお参りしてきたとのことでした。父はそのご婦人といろいろとお話をした後、彼女が帰ろうとする際に、「あなたはここに来る時には、杖を手にして来たけれども、帰りはその杖をここに置いて、神様を杖にして帰られたらどうですか」と勧めたのです。

金光教には、「金(かね)の杖をつけば曲がる。竹や木の杖をつけば折れる。神を杖につけばよい。神は、曲がりも折れも死にもなさらない」という教えがあります。神様に任せきるという厳しい教えなのですが、父の言葉を聞きながら、その時私の中に芽生えたのは、「まずは周りの人間に頼っていいよ。周りの人間を杖にしていいよと言ってくれているんだ」という思いでした。心配と不安、私がやらねばというプレッシャーに押し潰されそうだった私の心がふわりと浮き上がりました。同時に、いつか私が神様を杖にすることができるように願っている父の姿も浮かんできました。

そのラジカセは今も教会に置いてあります。それを目にするたびに、父に話し掛けます。「まだまだ心配でしょうから、どうぞ御霊(みたま)様として私の杖でいてください」

《先生のおはなし》

「月極駐車場」

福岡県・行橋教会　井手美知雄

おはようございます。パーソナリティーの岩﨑弥生です。

今、車に乗りながら、ラジオを聞いてくださっている方もいるかもしれません。車を持つと便利で良いのですが、それに伴って経費もかかってきます。ガソリン代に駐車場代。駐車場は、「なるべく便利で、安いところ」というのが借り手の心情ですが、駐車場を経営している側にも、いろいろな問題や悩みがあるようです。今日は、その駐車場にまつわるお話を聞いていただきます。

福岡県・金光教行橋教会、井手美知雄先生のお話で、「月極駐車場」。

私が奉仕する教会に数年前から参拝する中年の女性が、最近浮かぬ顔をしています。話を聞くと、「私と兄とで市内に共同経営している十数台分の月極駐車場がありますが、その近くに近々不動産会社が駐車場を開くということです。そうなると、経営がどうなるか心配です。向こうの利用料が安いのです」と言います。それを皮切りに、参拝しては、「来月からの契約を中止するお客が一人二人と出てきました。このままだと、根こそぎ契約者を持っていかれそうです」と言います。疑心暗鬼です。「周辺の月極駐車場を調べたら、競合するのは私のとこ

ろだけです」と深刻に話します。そうこうするうちに、向こうの新しい駐車場では、お客の審査が始まりました。

おろおろして参拝する彼女と一緒に神様にお祈りした後、私はこの際、金光教の信心ではどのようなお土地も大切に思うことを分かってもらいたいと、こう申しました。「あなたにぶしつけながらお尋ねしますが、これまでの満車のお礼を申し上げたことがありますか」と尋ねました。首をかしげて黙っています。さらにお尋ねしました。「その駐車場は元々どなたのですか」「それは、亡くなった父からの財産分けです」「そうですか。あなた方の先々を考えて残してくださったのでしょうが、亡くなったお父さんが仮にも、『私にご慰労金を払え』とは言いませんよね。親とはそういうものですからね。でも、あなた方から『お父さんのおかげで今日までも経営ができています』と、感謝の言葉を捧げたことがありますか」と申しました。返事はありません。

それで続けて、「その上で聞きますが、そのお土地はどなたのお土地と思いますか」と尋ねました。「名義は私と兄です」と、ここははっきりと言います。「あなたに是非聞いていただきたいのですが、金光教では、お土地は神様のお体そのものと受け止めています。所有はそれぞれがしていますが、信心からいうと、預からせていただいているのです。そのお体から生まれる石油や木材や農作物や、そういうものに神様が『取得税』を払えとは言いません。お与え

くださっています。あなた方についても、神様は土地代を払えとはおっしゃいません。それならば、大いに感謝を申し上げ、駐車場に手を合わせるような心持ちになっていただければよろしいのですが」と申して、お供えのお神酒をお下げしました。これを駐車場の四方にまいて、手を合わせますようにと勧めました。

彼女は参拝の都度、不安のままに契約状況をお話しされます。私は、「神様にお任せいたしましょう。その駐車場を大切にしていけるよう、一緒にお願いしましょう」と元気付けました。

しばらくしたある日、少し落ち着いた物言いで、「このことをきっかけに、向こうに見合う利用料にしたいと思います。父の代からのお客さんもいます。そのお客さんにも喜んでもらえれば、それが父の供養にもつながろうかと思います」と言うのです。駐車場に出向いて、手を合わせるうちに、不思議とそういう気持ちが生まれてきたのです。彼女は、「どうしたら駐車場が生きてくるのか求めていきたいので、そのことを神様にお願いしてください」と言います。さらに、「わざわざ数ある月極駐車場から私方を選んでくれています。今までは、契約の書類やら入金やら、管理に気を使うばかりでしたが、ご利用くださることがまずうれしいことです」と言葉を重ねるのでした。

今、再び満車の利用を頂いています。私は、彼女がありがたさに気付く心の経営をされるようになられたかと思っています。利用者の一人ひとりの交通安全を祈り、幸せになりますよう

にと願う、彼女のこの頃です。

ありがたいことが、向こうからやってきたんですね。

いかがでしたか。

お話の彼女は、「お土地は神様のお体そのもの」ということを知りました。そして、お土地を使わせていただくことに感謝する心が芽生えました。問題が起きた時には、経営を心配して、「土地を利用する」という考え方でしたが、先生のお話を聞いてからは、「どうしたら駐車場が生きてくるのか、お父さんが喜んでくれるか」を求めるように、思いが180度変わっていきました。

彼女が神様に感謝し、神様が喜ぶ生き方に変わっていくことで、わざわざ数ある中から彼女の駐車場を選んでくれるというれしいこと、

《先生のおはなし》

「私にできるでしょうか」

愛知県・豊川教会　今泉明

おはようございます。パーソナリティーの岩﨑弥生です。

早速ですが、今日は仕事の話を聞いていただきます。仕事をしていれば、誰かに認められ、やりがいを感じることもありますし、反対に、思うようにいかず、苦しくなって逃げ出したくなることもあるでしょう。今日のお話は、希望を持って転職してみたものの、なかなか思うようにいかず、悩みを持って教会に参拝した人のお話です。愛知県・金光教豊川教会、今泉明先生のお話で、「私にできるでしょうか」。

私の奉仕している教会に参拝している晴樹さんは、４年前、今まで勤めていた会社を辞めて転職することにしました。彼は、当時29歳。今までの会社では、これからも非正規社員のままであるということから、転職の決断をしました。

大手自動車メーカーに、まずは期間工として一定の期間働くことになりました。新しい会社では、早ければ1年で正社員の試験が受けられるということでした。出勤前には教会へ参拝し、その日の仕事が無事に勤まりますように、そして正社員になれますようにと祈念していました。

実際に仕事に行くようになると、段々と最初の頃の元気がなくなっていきました。１カ月程

経って、彼が参拝した時、「先生、昨日はさすがに落ち込みました。もう会社を辞めようとさえ思いました」と元気なく言う彼に、「何があったのですか」と聞きますと、「仕事を教えてくれている上司が、いつもとても厳しいのですが、昨日は『何度失敗するのだ。何度教えたらいいんだ』と怒鳴られてしまいました」ということでした。

２日後、彼は、会社の帰りに参拝して、「先生、とてもあの会社に勤めることはできません。もう辞めたいと思います」と言うのです。「どうしたのですか」と聞きますと、彼は、車の塗装のために必要なテープを貼る担当なのですが、その日、テープを貼り終えた時に、いつもの上司が来て、その貼ったテープを見るなり、「何だこれは！　やり直しだ」と言って、そのテープを全部剥がしてしまったそうです。彼はびっくりして、しばらく呆然としていますと、「何をボーッとしているんだ。すぐにやり直せ」とまた怒鳴られてしまったということでした。全く自信をなくしてしまった彼に、私は、しばらくは何も言うことができませんでしたが、神様に祈りながらこう言わせていただきました。

「あなたが怒鳴られたことは、とてもつらい事です。しかし、少し見方を変えてみますと、その上司は、あなたを思い、あなたに何とか一日も早く仕事を覚えてほしいと、ついつい強い口調になってしまったのではないでしょうか。これからは、その思いをくみ取って、強く何かを言われた時には、叱られたとは思わずに、私の

ことを思いやって教えてくださったと受け止めてみてはどうでしょうか。そして、教えてくださってありがとうございますと、言葉で、態度で表してみてはどうでしょうか。今日から神様に、上司の指導を心からありがたく受け止めさせてくださいと祈り、取り組んでください」と、そこまで私が言いますと、終始うつむいていた彼は、私を見て、「自分にそうしたことができるでしょうか」と言いましたので、「自分ですると言ってくれました。そして、君は正社員になりたいのだろう。全面的に協力するからと言ってくれました」ということでした。

1週間後、彼は、にこにこして参拝し、「今日、いつもの上司が、私の仕事を見て、だいぶ上達したなと言って褒めてくれました。そして、君は正社員になりたいのだろう。全面的に協力するからと言ってくれました」ということでした。

1年後、上司から正社員の登用試験を受けるように言われた彼は、入社して1年で正社員になることができました。同じ塗装の職場から、何十人も試験を受けたそうですが、合格したのは彼一人だったそうです。私が、「よく頑張りましたね」と言いますと、彼は、「ありがとうございます。全て神様のおかげです」と言いました。もう正社員になってから3年になります。彼は、仕事前に教会に参拝し、「どうぞ、仕事

に手違いがありませんように。心を込めて仕事ができますように。また職場の皆さんが、どうぞけがなく無事に仕事ができますように」と一心に祈り、神様と共に仕事をさせていただきますという思いで、今日も元気に勤めています。

いかがでしたか。

職場で、理不尽なことを言われたり、不当な扱いをされたら、会社を辞めることも選択肢の一つだと思います。晴樹さんの場合、辞めたいと思うほどのつらさや悩みをじっくり聞いてくださる先生がいました。先生が、つらいことの中にも意味があることを示してくださったおかげで、晴樹さんは、その中に光を見いだすことができたのです。その光を目指して、「神様と共に」という思いで仕事をしていくうちに、思いもよらない展開になっていきました。晴樹さん、本当に良かったですね。

《先生のおはなし》

「神様プロデュース」

福岡県・不知火教会　池本ひろ江

わが家には、いつの間にか物置部屋になってしまった部屋がありました。忙しさを理由に、どんどん荷物は積み重ねられ、開かずの間になっていました。ところが、姪と甥が初めて子どもたち3人だけで泊まりに来たいと連絡があり、かわいい姪っ子たちのため、その部屋を片付けることにしました。

整理も中盤に差しかかった頃、夫からラインが入りました。

「明日、友人2人を呼んで家で飲みたいけどいいかな？」

私は、友人の名前を見て、頭の中で瞬時に計算しました。気心知れた友人だし、気も使わなくていい。導き出された答えは、「いつものご飯に、ちょい足しぐらいでいっか！」。気持ち良く「いいよー！」とハートの絵文字も付けて返信しました。

当日の朝、夫が私の反応をうかがうように、「やっぱり家族も連れてきたいって言っているけど…大丈夫？」と恐る恐る聞いてきました。計画が崩されることにいら立った私は、「大丈夫なわけないやん！　奥さんや子どもたちがいるなら、メニューも量も変更せなんやろ！　料理を作る私に相談もなく、勝手に決めるなんて！　ありえんやろ！」。私のいら立ちに慌てた夫は、「だから、今相談してるんだけど」「今

さら奥さんたちも来たいって言ってるのを断るわけにはいかんやろ！」「大丈夫だよ。断るよ」「いい。私が嫌なやつになるだけやもん！」と、不毛な言い合いの末、気まずい雰囲気の中、夫は仕事に出掛けていきました。

一人になり、「あー、またやってしまった。何で私は、こんな言い方しかできないんだろう」と、自分の心を見詰めていると、ふと、もう一つの考えが浮かびました。

「いつも教会の先生が『起きてくることは、神様のお働き』とおっしゃるけど、これもそうなのかな」

私がお参りしている金光教の教会の先生は、「生活の中で起きてくる、自分にとって都合が良いことも悪いことも、あなたを幸せに導く神様のお働きなのだから、大切に受け止めて、受け入れてごらん」と常々教えてくださいます。先生の顔が浮かび、ひとまず「受け止める」ということに心の向きを変えてみました。

メニューを考え直しながら、引き続き部屋の片付けをしていると、古いダンボールが出てきました。開けてみると、私の子どもたちが使っていた積み木のおもちゃが出てきました。妹の子どもが生まれた時に譲っていましたが、使わなくなったので、「お姉ちゃんの家は、お客さん多いし、子どもが遊びにきた時に使ったら？」と、わが家に戻ってきていた物でした。「友人の子どもたちのおもちゃに、ちょうどいいやん！」。このタイミングで見付けたことに、心が少しウキウキしてきました。片付けも予想以

上にはかどり、すっきりとした元の部屋に戻りました。

冷蔵庫を開けてみると、数日前に頂いたお肉に目が止まり、開いてみるとひき肉でした。大人にはミートローフ、子どもには煮込みハンバーグを作ろうとひらめきました。メインのメニューが決まり、食事の支度に取り掛かろうとすると、遊びに行っていた大学生の長女が予定変更で帰ってきました。思い掛けない助っ人登場に、さらに心が弾み、ウキウキ気分で準備ができました。

予定より仕事が早く片付いた夫がひょっこり帰宅。朝とは別人のようなご機嫌の私に驚いていました。開かずの部屋から出てきた懐かしい積み木を見せながら、「受け止める」ということに心の向きを変えてからの出来事を話しました。「朝は、きつい言い方してごめんね」「こっちこそ、心配りが足りなくてごめん」。仲直りもできたところに、友人たちが集まってきました。

心からの笑顔で友人家族を迎えることができ、楽しいひと時を過ごしました。子どもたちもおもちゃに夢中で、ママさんたちとゆっくり話をすることもできました。子どもたちに作った煮込みハンバーグも好評で、いつも食事に集中できずしっかり食べない子も、たくさん食べてくれたようで、食事の時間が毎回憂鬱(ゆううつ)になるというママさんも喜んでくれました。子どもがジュースをこぼして着替える時や、おむつを替える時も、慌てることなく、片付けたばかりの

すっきりした部屋に通すこともできました。

私は、友人一家が喜んで帰ったあと、しみじみと「神様にプロデュースしてもらった2日間だったんだなー」と感じていました。ずぼらな性格の私をお見通しの神様が、姪と甥を使ってやる気のスイッチを押してくれて、部屋を片付けたことも、おもちゃを見付けたことも、数日前に頂いたお肉も、娘が帰ってきたことも、友人たちが来る前に夫と仲直りできたことも、全てが神様が準備してくださっていたもの。もし、私の考えで友人の希望を断っていたとしたら、夫と険悪な模様になり、友人にも嫌な思いをさせていたかもしれません。何より、私の心に「ありがたい」という幸せな気持ちは湧いてこなかったと思いました。

自分の計画や考えを壊されても、私を幸せに導いてくれる神様のお働きとして受け止め、受け入れていくと、素晴らしい世界が用意されていること。自分の考えに固執せず、しなやかな心で生きていくほうが、思い掛けない喜びや楽しみが用意されていることを、神様は友人家族を通して私に教えてくださいました。

心の持ち方を変えると、見え方が変わります。これからも、神様プロデュースに身を委ねて、しなやかな心で人生を喜び楽しんで生きたいと思います。

《先生のおはなし》

「ツイてない日なんて、ない！」

宮城県・仙台南部教会（せんだいなんぶ）　西川浩明（にしかわひろあき）

おはようございます。パーソナリティーの岩﨑弥生（いわさきやよい）です。

今皆さんは、どこでこのラジオを聞いてくださっていますか？　まだ朝の早い時間ですので、お布団の中から、あるいは、もう動き出して、車を運転しながらラジオを聞いてくださっている方もいらっしゃることでしょう。今日は、車の運転中、「ヒヤッ」とした体験を通して大切なことに気付かれた方のお話です。

宮城県・金光教仙台南部教会、西川浩明さんのお話で、「ツイてない日なんて、ない！」

12月のある朝。

「晴れましたね」。私は、先に待ち合わせ場所に着いていた浜野さんたちに声をかけました。

「そうだね。でも、先シーズンの雪はすごかったから油断はできないよ」

「ちゃんとスタッドレス履いてますから、大丈夫ですよ！」

その日は仕事で、私の住んでいる宮城県仙台市から岩手県盛岡市まで、片道約160キロの道のりを、車で日帰りすることになっていました。暖冬を思わせる青空の下、私と浜野さんたちを乗せた車は、予定通り仙台を出発しました。

走り出してまもなく、信号のない丁字路で右

折しようとした時、浜野さんが突然、「ストップ！」と大きな声を出しました。すると、クラクションを鳴らしながら目の前を走り去る車。私の確認が不十分で、危うく左から来た車にぶつかるところだったのです。

「すみません！　浜野さんが教えてくれなかったらぶつかってました。ありがとうございます」

「いやいや。先は長いから、安全運転で頼みますよ」

私は、気を取り直して慎重に運転し、無事盛岡に着きました。

仕事を終え、夕方。曇り始めた空を見ながら、「山間部は降ってるかもね。疲れたら交代するから、いつでも言ってよ」と、後部座席の井口さんが声をかけてくれました。「大丈夫ですよ。井口さんこそお疲れでしょう。寝ていてもいいですからね」と話しながら、インターチェンジでＥＴＣゲートをくぐった途端、警察に停車させられました。

「こんにちは。後ろの方、シートベルトはされていますか？」「あ、今します！」と井口さん。しかし、時既に遅し。「ゲートをくぐったらもう高速道路ですので、後席シートベルト装着義務違反で違反点数１点になります。運転手の方こちらへ…」と無情な宣告が。

日も暮れ、雪がちらつき始めた頃、仙台の街の明かりが見えてきました。インターチェンジのＥＴＣゲートをくぐろうとすると、今度は前の車が急停車。「危ない！」。もう一人の同乗

者、船山さんが思わず叫びました。が、幸い速度を十分落としていたので、ぶつからずに済みました。

「トラブル続きの道中だったけど、事故にならなくてよかったよ。お疲れ様でした」

「すみませんでした」

「家に着くまで気を抜かないでね」

「はい、皆さんもお気を付けて」

みんなと別れ、家に帰り着いた私は、「ああ、疲れた。立て続けにあんなことが起こるなんて、ツイてない日だったなあ」とぼやきながら、カバンからしわくちゃの違反切符を取り出しました。そこで、ふと心を落ち着けて考えました。

「待てよ。今日のことは、自分の不注意から起きたことだ。ツイてなかったで済ませるのは、何か違うんじゃないか」

そう思い直すと、私は違反切符のしわを伸ばして、家の、神様を奉ってある神前にお供えしました。すると、自分の不注意をわびる気持ちが自然と湧いてきました。

「神様、今日は私の不注意で交通トラブルに見舞われました。同乗者にも怖い思いをさせてしまいました。そして、それをツイてなかったのだと、あなたのせいにしてしまうところでした。申し訳ありません」

冬の東北、雪、高速道路、軽自動車に４人、長距離の日帰り。そこには、どれほど多くの危険が潜んでいることでしょう。ちょっとの油断、少しのタイミングや状況の変化によって、思わぬ事故につながることが現実にあるのです。

翌日、スマートフォンで何気なくニュースを見ていた私は、はっと息をのみました。昨夜、東北道上り線で、ちょうど私たちが通った後くらいに、トラックと乗用車3台が絡む大きな事故があったというのです。

事故はいつなんどき、誰に起こるか分かりません。私は、昨日のことを「ツイていない」と思うのではなく、「いつでも心を落ち着けて、気を付けながら運転できるよう、神様に日々お願いすることの大切さを、トラブルを通して教えてくださったのだ。『よく気を付けよ』との神様からのサインだったのだ」と、はっきりと分からされたのです。

私は神前に向かい、手を合わせ、事故に遭われた方々のことをお祈りし、私自身、大事なことに気付かせていただいたことを神様にお礼申し上げました。

（ナレ）いかがでしたか。

トラブル続きで、ツイてないと思ってしまえばそれまでですが、一つひとつの出来事は、「大丈夫か？」という神様からのサインだったんですね。

そう考えると、「朝からツイてないなあ」と思った出来事も、きっと意味のあること。ここからのあなたの今日の一日が、ツイてる一日、神様がついている一日でありますように。

《先生のおはなし》

「劇団ＧＡＨが目指すもの」

東京都・麻布教会　松本信吉

（ナレ）私の奉仕する金光教麻布教会を拠点に活動する劇団があります。アルファベットのＧ・Ａ・Ｈで、「ガー」と呼びます。元々は別々の活動をしていたメンバーが集まり、劇やコントで子どもたちを笑顔にしたいとの思いから、２０１６年に劇団ＧＡＨは誕生しました。劇団を主宰する源清治さんは私の弟でもあり、私も彼らの思いに感銘を受け、教会のホールを稽古場所として使ってもらい、活動の後押しをさせていただいています。

そして、舞台を開くと彼らの願いどおり、たくさんの子どもたちが集まってくれました。劇団の中心的存在、中村優太さん30歳は、次のように語ります。

（音源）ここは今、「子どもたちの笑顔のために」という目標があって、みんなで笑い合いながらやってるんですけど、すごく何かそれが素敵だなと思って…子どもたちの笑い声とか、距離も近いですし、普通の舞台とか劇場より、全然身内感覚でやってるんですけど、それもまたすごい良くて…。子どもたちを笑顔にしてあげようという思いで、こっちがやってあげてるという思いで始めたんですけど、逆にもらってるものがたくさんあるなということに次第に気付いてきました。素晴らしいことをやらせていた

だいているなと思っています。

また、松良茉侑（まつらまゆ）さん21歳は、声優の学校に通うために上京しました。今は卒業し、アルバイトをしながら、劇団ＧＡＨでも生き生きと活動しています。

（音源）やっぱり声優になりたいという気持ちで上京してきたので、学校で学んでることを、こういうＧＡＨでのコントとかで生かしていけたらいいなという気持ちで最初はやってたんです。けど、それよりもここでコントとか何度も出させてもらうにつれて、学校で学んでることじゃないことを…それこそ子どもたちとどう触れ合っていくべきなのかとか、お芝居の技術じゃなくて、どういう関わり方をしていったら周りのみんなが笑顔になってくれるかということを学ばせてもらっていて。笑ってくれたらうれしいし、こっちも向こうが笑ってくれたら笑顔になれるし、お互いの関係でお芝居というのができてるんだなということを、ここで一番学びました。

２０２０年の２月、麻布区民センターで上演された「があ校」は、「ＧＡＨの学校」という意味で付けられたタイトルで、大勢の子どもたちを含め、３日間５公演で520人の観客を動員。舞台の役者と客席と一体となって劇を楽しむのがＧＡＨの演劇の特徴です。

（音源）「があ校」も、ここでご近所さんを含めた小さいコントだったのが、まさかあんな大きな劇場でやらせてもらえるようになるとは思ってもみなかったので、すごい幸せなことだと感じてます。

メンバーそれぞれが手応えを感じ、劇団活動が波に乗り始めた矢先、新型コロナウイルス感染症が拡大し、活動が厳しくなります。

劇団員の大半は20代の地方出身者の学生やフリーターです。緊急事態宣言が出て、彼らは、地方の実家に帰ることもできず、都内のアパートで一人部屋にこもっての生活に、不安と寂しさが募り、心細くなっていました。そこで、徐々にメンバーが麻布教会のホールの稽古場に集まり、「3密」を避け、感染予防対策を施しながら、少しずつ稽古を再開。その時に、今できることとして、ユーチューブでのコント動画を作成しました。

（音源）コロナで不安を感じない人はいないと思うんですよ。みんな周りもマスクをしてるし、周りがコロナ持ってるんじゃないかみたいな…テレビとかも、けっこうやばいぞみたいな感じで流されるんで。でもやっぱり演劇を通じて僕が感じているものは、「人と人とのつながり」とか、「助け合う」「一人じゃ人間生きていけない」ということを30歳になってヒシヒシと感じてるので…。やっぱり笑うということはすごく大事だと思うし、むしろ今、一番必要なこと

なんじゃないかと思うんです。

新型コロナウイルスが流行し、感染の不安や、人間不信で孤独に陥ったり、寂しさが募る中、彼らは東京都が募集した「アートにエールを！」という事業に自分たちの作品の動画を応募し、見事入選しました。

「損得勘定」を英語にもじった「son talks can joke～おかげは和賀心にあり」と題したこの作品は、野球のグローブをいじめっ子に奪われてしまった男の子が、物を大切にしなかったことを反省したところから、グローブが返ってきて、いじめっ子とも仲良くなるというストーリー。ズームを活用したこの動画は、登場人物を９分割した画面の中で上演。「物を大切に、人を大切に」することを訴えます。

劇団主宰者の源清治さんは、「今の世の中はキャッチボールではなくてドッジボールになっている。自粛警察のように一方的に叱るよりも、お互いの心が助かる言葉のやりとりを大切にしたい」と願っておられます。

自粛やソーシャルディスタンスが叫ばれる中で、今こそ心のキャッチボールの救いが必要となっています。相手のどこに、どのスピードで投げれば捕りやすいか、お互いに気を配っていく。

私も、この劇団の活動をとおして、今まで以上に、人も我が身も助かる金光教の生き方が、多くの人たちに伝わることを願っています。

《先生のおはなし》

「ぼく、試験が怖いよ」

大阪府・平野教会　宮下寿美

「ぼく、試験が怖いよ」。息子が私に言いました。それは、小学校の試験を翌日に控えた夜のことでした。

わが家の小学校受験のきっかけは、幼稚園の仲良しの友達が、別の幼稚園の編入試験に合格し転園したことでした。息子が、「ぼくも同じ幼稚園に行きたい」と言いましたが、もう試験は終わっているので無理です。それなら友達が行く小学校に行きたいと言い出しました。その小学校に行くためには勉強をし、試験に合格しなければいけないと説明しましたが、息子の意志は変わりません。

大人だらけの中で育った息子は、子どもに慣れておらず、入園した頃は、教室にすら入れませんでした。しかし、園の先生の働きかけで次第に友達と遊べるようになっていきました。息子にとって、友達がいることが小学校選びの一番大きなポイントでした。

その小学校は、本人が望む友達がいて、少し遠いですが歩いて通える距離です。そこで、わが家の小学校受験へのチャレンジが始まりました。

本人にとっても親にとっても初めての経験です。塾に行き模擬試験も受けます。実体験が大切と教わり、妻は息子に季節の草花を見せるため何度も大きな公園に行ったり、昆虫を飼った

り、田植えや稲刈り体験に参加したり、季節ごとの行事を大切にしていきました。そんな体験型の学びは大好きですが、書くことが不得意だった息子は、机に向かう勉強は苦手でした。模擬試験の成績はいつも低空飛行です。息子は小学校に行きたいけれども、そんな勉強はしたくないのです。嫌がる子どもを机に向かわせるのは、親にとっても試練です。私も妻も、「早く座りなさい」「ふざけないで、真面目にしなさい！」「どうして分からないの⁉」とだんだん声が荒々しくなる始末。まさに受験生の親の失敗例になっていました。怒られた子どもは、ますます嫌がる悪循環です。年長の夏には、とうとう塾の宿題を全くしなくなってしまいました。一緒に遊んだり本を読んでいても、宿題となると慌てて逃げていきます。受験本番まであと半年。子どもの塾に付き添っていた妻は、一生懸命な分、焦りもいら立ちも募っていました。

そんな時、妻がイタズラをした息子を叱り付けていたら、その場に居合わせた方に、妻が叱られました。その方は、子育てをしていた若い頃、金光教の先生から、「自分の子どもではあるけれども、神様の大切な子どもを預かっているのです。わが子だからと、ぞんざいにしてはいけませんよ」と教えられたそうです。だから妻にも、そんな叱り方をしてはいけないと教えてくれたのでした。

妻は、叱られてハッとしたと話してくれました。「自分のほうが心に余裕がなくなり、追い詰められている。気持ちを切り替えないといけ

ないのは自分だ」と。そして妻は息子に、「したくないなら、これから塾の宿題はしなくていいよ」と伝えました。息子は引き続き宿題を何一つしません。怒られないので、安心して、しません。しかし、親の心が変わると、次第に息子も落ち着き出しました。ずっと低空飛行だった成績が少しずつ上向いてきました。そうして塾の先生が言われていた「親も笑顔で楽しむ！」という言葉がすんなりと心に入ってきた頃、受験本番を迎えました。

試験を翌日に控えた夜のことです。一緒にベッドに入った私に息子が言いました。「合格できるかなあ。ぼく、試験が怖いよ」と。今まで模試の結果を気にすることもなかった息子なので、びっくりしました。私は、息子をギュッと抱きしめ、「神様、どうぞ不安な心をお預かりください」と心の中で祈りながら、「そうかそうか、不安だなあ。大丈夫、大丈夫」と頭と背中を優しくさすりながら話しかけました。しばらくすると、息子は寝息をたて始めました。

息子は小さな胸に不安と心配を抱えながらも、一生懸命に頑張っていたんだな。抱えきれない不安を素直に言えたんだなと、私は胸がいっぱいになりました。翌朝、元気を取り戻し、妻と一緒に明るく手を振って出かけていく子どもを、「いってらっしゃい！」と送り出したのでした。

試験を終えて帰ってくると、妻は、「お母さん緊張しすぎて面接で失敗しちゃった。もし不合格ならお母さんのせいだわ。ごめんね。もし、

合格してたらあなたが頑張ったからだよ」。息子も、「お母さんの面接ダメダメだったもんね。ぼくはちゃんとできたよ」とにこやかに笑い合って、親子共に受験を楽しんで無事に終えることができました。

私たちは誰でも、焦りや不安、怒りや憤りが心にたまりすぎると、心を穏やかに保つことが難しくなります。私も妻も、いつの間にか追い詰められていました。子育てのアドバイスをもらったタイミングは絶妙で、神様がその方をとおして気持ちを解きほぐしてくれたのでしょう。また、受験前夜に、息子が不安な気持ちを言葉にできたのも、とてもありがたいことでした。

人は誰でも、不安や悲しみなど、抱えている気持ちを言葉にし、それを聞いてくれる人がそばにいてくれると安心できます。息子も不安が和らぎ、元気な心を取り戻せたのですから。

思いがけずに始まったわが家の受験でしたが、その試練をとおして親子共に育つことができ、また元気な心でいられることのありがたさ、大切さを再確認させていただけました。

今日も息子は、仲良しの友達と一緒の小学校で、楽しく勉強しています。

《先生のおはなし》

「マスクの下の笑顔」

福岡県・上山田教会　池田美枝

おはようございます。パーソナリティーの大林誠です。

最近、私もマスクをつけることが多くなりました。でも、体を動かす仕事の時は、息苦しいですよね。マスクを外せないお仕事の方は、本当に大変だろうなと思います。今日は、そんな一人、ある保育士さんのお話をお聞きいただきます。「マスクの下の笑顔」というお話。福岡県・上山田教会の池田美枝さんです。

私は保育園で働いています。0歳児を担当し、体力的には大変ですが、かわいい子どもたちに囲まれて、充実した毎日を過ごしています。

季節の変わり目には、体調を崩し気味で登園する子も多くなりますので、私もマスクをつけることが以前からよくありました。マスク姿を怖がらないように、子どもたちが喜ぶようなイラストをマスクの表面に描いています。子どもたちは興味津々でマスクを引っ張ります。「引っ張らないで」と言いながら、その頃は、かわいい手で触られるのが楽しくもありました。

しかし、新型コロナウイルス感染症のことを毎日耳にするようになると、次第に私の心からゆとりが失われていきました。「マスクを引っ張らないで」という声が厳しく冷たくなっていくのが、自分でも分かりました。その上、感染

予防を徹底するためにゴーグルまでつけなければならなくなり、ますます気持ちに余裕がなくなっていきました。

子どもたちに優しく接してあげたい気持ちはあっても、笑顔が出てこないのです。そんな自分がつくづく情けなく思えました。その一方で、情けない顔をしていてもマスクで見えないし、無理に笑顔で過ごさなくても0歳児には分からないのでは…なんて思いにもなりました。

0歳児のクラスには、毎月新しい赤ちゃんが入ってきます。1カ月くらいでやっと慣れてきたと思ったら、そこへまた新しい赤ちゃんが入ってきて、大泣きするのです。私まで泣きたい気持ちになることが度々でした。

けれども、必死に泣き叫ぶ赤ちゃんをあやしているうちに、ふと、「この子にとって、私はどう見えているのだろうか」という思いが頭に浮かびました。生まれて初めて親から引き離され、ゴーグルにマスク姿の保育士に預けられるのです。無力な赤ちゃんにとって、それはどれほどに恐ろしいことでしょうか。私たち大人には想像も付かないほどの恐怖に違いありません。そう思うと、その子がかわいそうで、愛しくてたまらなくなり、思わず胸に抱き締めていました。

その日の夜、神様に拝礼していると、金光教の教祖が遺したこんな教えを思い出しました。

「かわいそうと思う心が、そのまま神である。それが神である」

泣いている赤ちゃんを見て、「かわいそうに。

早く安心させてあげたい」と思ったのは私です。ところが、教祖はその思いを、「そのまま神」「それが神」と教えているのです。

「あの時の私の思いは、神様のお心だったのかも。神様は、ずっと私の内側から働きかけてくださっていたのかもしれない。マスクの中でいつも情けない顔をしているこんな私に、どうかこの子を助けてやってくれと頼んでくださっていたのでは…」。そう思うと、じんわり胸が熱くなるのを覚えました。

保育園での仕事は相変わらず目まぐるしい忙しさです。けれどもその日以来、同じ仕事もあまり苦痛に感じなくなっていきました。むしろ、「今日も神様がこうして私を使ってくださっている」と思うと、うれしい気持ちで取り組めるのです。あれほど嫌だったマスクやゴーグルも、私や、私の腕の中にいる子どもたちを守ってくれるありがたいものに見えてきました。

笑えなかった私が、今ではマスクやゴーグルがずれるくらい笑う日もあります。私の笑顔が子どもたちの安心につながり、子どもたちの安心がまた、私の喜びになるという、すてきな循環が生まれてきたようです。

お天気がよければ、午前中は、全園児が園庭に出て遊びます。4歳のショウくんはミチコ先生が大好きで、1日に何回も「ミチコ先生、だ～い好き」「ミチコ先生と結婚する」という声が聞こえてきます。そのショウくんが、ある日、私の前に来て、「先生、大好き」と言うのです。一瞬、「人違いじゃないの？」と思いました。

でも、ミチコ先生と私は全然違う体型をしているので、ゴーグルとマスクで顔が見えなくても、ショウくんが見間違うはずはありません。

「ショウくん、私も大好きよ」と返したら、ニコッとして走り去っていきました。私自身、変われたのだと実感しました。ショウくんはいち早くそのことに気付いてくれたのでしょう。

走り去ったショウくんが、シロツメクサの花束を手に、また私の前にやって来ました。「ありがとう」と言って受け取ると、「結婚してください」と言って走り去っていきました。「ミチコ先生にはこのことは言えないな」って、マスクの下でニヤリとしてしまいました。シロツメクサの花束は、神様からのご褒美だったのかもしれません。

いかがでしたか。

池田さんは、かわいそうにという気持ちを神様からのお頼みと受け止めて、仕事に取り組んでいきました。神様が期待してくださると思えば、元気が出ますよね。それに気付くためにも「かわいそうと思う心はそのまま神」という教えを、いつも心に留めておきたいと思います。

《先生のおはなし》

「待たされて」

三重県・鳥羽教会　野呂教行

おはようございます。パーソナリティーの大林誠です。

先日、朝の散歩をしていたら、車を洗っている人がいました。鳥のフンが車の屋根にべっとり付いていたんだそうです。「朝早くから大変ですね」と言いますと、「いやあ、鳥のおかげで、やっと洗車をする気になりました。これが『フン切り』というものですな」と言って笑っています。私も一緒に笑いながら、「ああ、そんな受け止め方があるんだな」と思いました。

さて、今日お聞きいただくのは、三重県・金光教鳥羽教会の野呂教行さんによる「待たされて」というお話です。これも、こんな見方があったのかという気付きのタネにしていただけるとうれしいです。

私は10年ほど前から、心臓に不整脈が出るようになりました。何年か経つ間に慢性化し、手術が必要となりました。2年前に循環器専門の病院でカテーテル手術を受け、昨年の4月、定期検診で通院した時のことです。

この病院は救急病院でもあり、急患が入りますと、あらかじめ予約していた診察時間が大きく遅れることもあります。

この日、待合室で待っていましたら、女性2人の話し声が聞こえてきました。その方は、「も

う血液検査から1時間も待つのに何のアナウンスもないわ」「雨が降ってきたら洗濯物どうしようかしら。いやだ、私帰るわ」。そんな感じで、ずっと愚痴が止みません。

連れの人に、「次の番かもしれないからね。もう少し待って」と諭されていました。しばらくして検査室に呼ばれて入っていきましたが、5分後には戻り、更に愚痴が止まりません。「1時間も待って、たった5分の検査よ」「早く終わる人を先に診てほしいわよねえ」という感じで、また言いたい放題です。精密検査の必要や、異状がないことにまで不足を言っています。

この病院は患者が多く、問診までに2時間ぐらい待つのはよくあることです。大きな声は、周りの人をとてもゆううつな気持ちにさせます。連れの人は、「みんな同じように待っているから」と言ってなだめますが、全く収まる様子はありません。私はひと言声を掛けようかと思いましたが、その時、またその方は呼ばれて次の検査室に入っていきました。

この方に限らず、この病院では診察を待つ時間を気にする人が時々おられます。私は、「待ち時間が長いね！　いつになったら診てもらえるんだろうね？」と病院で話し掛けられた時には、「この病院は、緊急で危ない人ほど、密着して付き添ってくださいます。待ち時間が長ければ長いほど、あなたの体に心配がないということですから安心してくださいね」と言ってあげることにしています。そうしますと、たいていほほ笑んで喜んでくださいます。

なぜそのように感じるようになったのかと言いますと、８年前のある暑い夏の日のことでした。私は定期検診で病院に行きました。その時、なぜか頭がとても熱かったのですが、気温のせいかと思いながら、心電図室で横になりセンサーを付けますと、なぜか眠ってしまいました。

足音が聞こえ、目を開けますと、主治医と看護師さんがいて、私の右腕は既に点滴されて処置室にいました。「どうかしたのでしょうか？」と聞きますと、「強い症状の発作なので監視します」と言われました。鼓動が１分間に200回ほどあり、先生は付ききりで心電図モニターをにらんでいます。鼓動が止まらないよう一生懸命になってくださる先生の姿に、私は「ありがたいなあ。他の患者さんを待たせて申し訳ないなあ」と感じました。そして先生は、「心臓が頑張っています。あなたも頑張ってください」とおっしゃいました。

私は祈りました。そして２時間ほど主治医を独占したわけです。院内には急患のアナウンスが流れ、他の予約患者さんも私のことを思い、待っていただいていることを強く感じました。そして、私の心臓は徐々に平常に戻り、落ち着きを取り戻しました。

私は、病院の中で発作が起きたことは、神様のおかげだと感じました。もし、車の運転中に発作が起きて気を失っていたら、自分の命だけでなく、縁もゆかりもない方の命を奪っていたかもしれません。

この病院での経験の後、たとえ長い時間待た

されても、先生のひと言しかないような短い問診であることが、とてもうれしくて、この上もない幸せでありがたいことなのだと思うようになりました。「何も異状ないですね。良くも悪くもないですよ」という、お医者様のそのひと言が楽しみな言葉だと思うようになったのです。

私は、待ち時間が長いほどに、いつも自分の助けられた一部始終を思い出すことにしています。そして、急患の方があれば、「無事に手当てができますように」と、お祈りができるようになりました。

待たせていただくことは幸せなこと、ありがたいことだと実感しています。いろいろなことをとおして、神様は大切なことに気付かせてくれる。また一つ、神様からお育ていただいたように思っています。

いかがでしたか。

野呂さんは、病院で長時間待たされる間も、同じように順番を待つ人たちの気持ちや、急を要する患者さんのこと、病院で働く人たちのことも思いながら祈ります。この広やかなものの見方は、神様の眼差しそのものではないでしょうか。

病院に限らず、地球上の人間はみな、いろんな悩み苦しみを持ちながら、関わり合って生きている。そのことを、いつも忘れずにいたいものです。

《先生のおはなし》

「おさがりの自転車」

鳥取県・石脇教会　福場信枝

おはようございます。パーソナリティーの岩﨑弥生です。

今日は、鳥取県・金光教石脇教会、福場信枝さんのお話で「おさがりの自転車」を聞いていただきます。

私たちは思いもかけないことに遭遇して、悩んだり落ち込んだり、ほんのささいなことでイライラしたり、もやもやしたりします。自分の心なのにどうすることもできず、心も体も元気がなくなってしまうことがあります。そんな時、どうしたらいいのでしょう。

新学期を迎え、真新しい自転車に乗って学校に通っている女子高生を見ると、思い出すことがあります。

それは、娘が高校生になる春のことでした。高校は自転車で通える所にあったので、新しい自転車を買ってもらい、それに乗って学校に通うのを、娘は楽しみにしていました。小さい頃から何でも兄のお下がりを使ってきた娘にとって、初めて買ってもらえる自分だけの新しいものです。「いつ買いに行くの？」と、娘はうれしそうに尋ねてきました。

私も４人兄弟の３番目で、いつもお下がりを使っていたので、新しい物に憧れる彼女の気持ちはよく分かります。しかし、わが家には既に、２人の兄が使っていた自転車が、比較的綺麗な

状態のまま使われずに置いてありました。
新しい自転車を買ってあげれば、娘が喜ぶことは分かっています。でも私は、このお下がりの自転車を使ってほしいと思っていました。物は、使われることで初めて物として生きてくるし、大切に使うことで喜んでくれるのだと思います。置きっ放しにするのではなく、大切に使わせていただく。そのことを分かってほしい。そんな願いを込めて私は、「あなたの気持ちも分かるけれど、この自転車を使わせてもらってはどうかな」と、娘に話しました。
しかし、それ以来娘は、自転車のことを思っては浮かない顔をするようになりました。娘も分かってはいるけど、やっぱり新しい自転車にも乗りたい。何ともすっきりしない様子です。親の思いを強要して我慢をさせても、娘の心は助かりません。無理やり納得させてお下がりの自転車で学校に通わせても、自分の足代わりに走ってくれる自転車を、ありがたい気持ちで乗るどころか、大人になっても、「あの時自転車を買ってもらえなかった」という思いだけが残るかもしれません。
自分の心は自分ではどうすることもできません。ましてや、人の心は、たとえ親子であってもどうすることもできません。自転車の件は、娘がこれから経験するであろう出来事の中では、ささいなことのはずです。でもそのささいなことに人間はいつも心を揺らし、悩み、心を痛めます。私には、どうなれば娘の心が晴れるのか分かりません。私にできることは、神様に

娘のことをお願いし、また、ここまでのお礼を申し上げることでした。「このたび娘は高校に合格させていただきました。ここまで成長させていただき、ありがとうございます。今、自転車のことで心が落ち着かないようです。どうぞ、心が助かりますように」。私の産んだ子ではあるけれど、私は娘の命をつくることも手足を動かすこともできません。私は神様から娘を授かったのですから、その神様に娘の今の命のお礼、ここまでのお礼を申さずにはいられませんでした。

それから数日後のことです。娘がすっきりした顔で言いました。「友達のKちゃんがね、おじいちゃんから、『新しい自転車は買わずに、今家にある自転車を大切に使わせてもらいなさい』って言われたんだって」。

Kちゃんとは、入学したら一緒に高校に通う約束をしています。そのKちゃんが、「新しいママチャリに乗りたいし、今の自転車はサビだらけなんだけど、でもやっぱり大切に使わんとな」と言ったそうです。Kちゃんのその言葉で、娘は何かを感じ、心が落ち着いたようです。そして鼻歌を歌いながら自転車を磨き出しました。

私は、「何と、神様はこんなふうに働いてくださるのか」と驚き、お礼を申しました。私には彼女の心が落ち着き、元気が出てくる方法は分かりませんでした。それでも神様は、それぞれの思いをしっかり聞き届けてくださいました。

そして娘は、そのお下がりの自転車に乗って、颯爽（さっそう）と通学するようになり、3年間の高校生活を過ごしました。

あれから8年。社会人となった娘は、大きな問題、ささいな出来事に心が揺れる毎日のようですが、今の今、神様のおかげで生きていることへのお礼を申しながら、成長していっているように思います。

いかがでしたか。

「自分の心をどうすることもできない。ましてや娘の心をどうすることもできない」。本当にそうだなあと共感しました。だからこそ、福場さんは、娘さんのことを生まれてからずっと祈ってきたんですね。命を頂いたお礼、ここまで育ったお礼、そして、神様に喜ばれる生き方ができるようにと祈っておられたのでしょう。言っても聞かないから言わないのではなく、ずっと祈りながら育ててきたことが、このような導きを頂けたのかなと思いました。よく「祈ることしかできない」などと言いますが、「祈ることができる」んですね。

《先生のおはなし》

「親に頼る」

大阪府・春日出教会　川勝信道

おはようございます。パーソナリティーの大林誠です。

今日は「親に頼る」というタイトルのお話を聞いていただくことになっています。このタイトルを見た時に、私は何歳頃まで親に頼っていたかなと考えさせられました。父はもう5年前に亡くなりましたが、いまだに父の霊前で、「この問題、どうしたらいいでしょうかねえ」なんて相談していますので、この分だと、一生頼り続けそうな予感がします。

さて、お話しくださるのは、大阪市にあります金光教春日出教会の教師、川勝信道さんです。

「親に頼る」。

現在私は、妻と中学3年の長男、中学1年の次男、小学4年の長女に恵まれつつ、金光教の教会で御用をさせていただいております。

次男が小学校5年生の時のある日、夕食後、家族そろってテレビを見ながらくつろいでいると、彼があるコマーシャルのセリフをまねして、「俺、大学に行くのやめる」と言いました。私が、「じゃあ、やめとき」と言うと、彼は、「どうせお金がかかるからやろ」と言いました。そこで私は、「行くなら自分のお金で行き」と言いました。すると彼は、「いや、俺は親のすねをかじる！」と言いました。そんなことをキッ

パリと断言することが「面白いなあ」と思ったのと同時に、「これでいいのやなあ」とも思いました。

と言いますのも、私は若い頃、親の世話になることが情けないことのように思っていたのです。「親の世話にならず、自分でやっていく！」と強く思っていた私は、大学に行ってほしいという親の願いも聞かず、高校卒業後はアルバイトをしながら、中学の時から友人たちと組んでいた、バンド活動を続けておりました。二十歳くらいの時には家を出て一人暮らしを始め、毎日を自由に楽しく過ごしていました。

しかし、何年かすると、友人たちは大学を卒業して就職したり、結婚をして家庭を持ったりして、バンド活動ができなくなりました。バンドのことしか考えていなかった私は、一人取り残されたような思いになってしまいました。そんなこともあって、心の病にかかり、アルバイトにも行けなくなり、借金もでき、行き詰まってしまいました。結局は親の元に帰って、借金も親に払ってもらい、精神科に通いつつ、家で養生することになりました。

そうした中、古くからの友人が、「おまえの家は金光教の教会なんやから、そこの教師になったらどうや」と言ってくれました。先の見通しも立たない私にとって、その言葉は一つの後押しになりました。考えてみれば、教会に育ちながら、金光教についてほとんど知らなかったのです。そこから金光教の信心を勉強するようになり、病状もだんだんと回復していきました。

そして、26歳の時に、金光教の教師を養成する金光教学院に入り、1年の修行を終えて教師になり、教会の御用をさせていただくようになりました。

そのような中で気付かされたのは、それまでの自分勝手で自己中心的な自分の姿でした。親の言うことにも人の注意にも聞く耳を持たず、「何でも自分でできる」「自分が常に正しい」と思い込み、そして、そのために自分が苦しむばかりでなく、親兄弟や友人たちにも大変な心配と迷惑をかけていたのです。

金光教の教会で、ご神前で唱える言葉の中に、「人とある身は神をわが親神と慕いまつりて限りなき恵みのなかに生かされて生くることこそ道理なれ」という文言があります。私も信心を進めていく中で、親神様である天地金乃神（てんちかねのかみ）様に生かされて生きている人間の一人として、何事も自分だけの力ですると思わずに、神様にお願いしてさせていただき、神様と共に歩む生き方をしたいと願うようになりました。

そうしますと、「自分が！」「自分で！」という力みや焦りもなくなり、心も落ち着き、安心して物事に取り組むことができて、神様がいろいろと働いてくださっていることを感じられるようになりました。つらい苦しいとばかり思っていた心が、だんだんとありがたい心にならせていただきました。そして、心配ばかりかけてきた親に少しでも安心してもらえるようにと願っておりましたら、結婚もでき、子どもにも恵まれ、親も喜んでくれるようになりました。

本当にありがたいことです。

子どもが「親のすねをかじる」と言った時に、「これでいいのやなあ」と思ったのは、私自身のこのような経験があったからです。かつての私のように何でも「自分で！」と意地を張るより、素直にお世話になったほうがいいと思ったのです。そして私は神様に、「子どもが親のすねをかじると言っておりますので、どうぞ立派なすねをお授けくださいますように」とお願いさせていただきました。

いかがでしたか。「俺は親のすねをかじる！」という小学生のセリフ、面白いですね。

「人事を尽くして天命を待つ」という言葉がありますね。人間としてできる限りの努力をし、結果は神様にお任せするということで、これは人生の大切な心構えだと思います。しかし、その「人事を尽くす」というのも、自分の力だけでできるのではなくて、神様から命を恵まれ、多くの人や物のお世話になってこそできることなんですね。

そのありがたさを胸に刻みながら人事を尽くす。今日をそんな1日にしたいと思います。

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送　日曜日　あさ5時40分

放送センターHP
「こころで聴く
おはなし」

「こころで
聴くおはなし
Podcast」

放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。